

東南アジアにおける生物研究のありかたについて

吉 井 良 三

1 ま え が き

どのようなテーマの生物研究が、これからの調査において、東南アジア研究センターとして実行可能であるか、また、現段階において必要であるかということの見当をつけるのが、今回の私の旅行の課題であった。40日の出張期間にフィリピン・インドネシア・マレーシア・タイの4ヶ国をめぐり、1ヶ国について平均10日間であったために、この旅行では、極めて要点だけをつかむことに努力した。それぞれの国において、生物学の研究サークルと接触して、その研究活動の指向を知り、政府関係部局の生物研究に対するイメージをさぐり、また、各地方の自然環境に直接に触れることにより、将来のプロジェクトの舞台を明らかにしようと努めた。その感想を思いつくままに論じてゆきたい。

2 世界誌と地方誌

生物学は自然科学の1部門にすぎないので、その知識は一般的のものと、特殊なものに分けることができる。いろいろの生物に共通の生理現象の如きは前者であり、それぞれの土地、あるいは生物に特有の現象を取り扱う場合には、後者となる。この2つの傾向が互いに交流し合い、一般から特殊へ、特殊から一般へとインフォメーションが交換され、そこに生物学そのものの進歩と、発展が見られることは、他の科学の分野と少しも異なるものでない。そして、我々がここに東南アジアという地球上の一定の地域を設定して、その地域研究の一環としての生物学を考えるとということになれば、その研究は当然の帰結として、特殊から出発し、その一般化というルートをたどらざるを得ないであろう。また、このような世界誌のための地方誌といった関係は、今までにも生物学の各分野で行われているところである。

3 植物誌のばあい

自然誌の研究においては、実際面から、これを植物と動物とに区別してあげてみたい。植物誌においては、第1期として、パイオニア的の調査が行われる。日本におけるツンベリー、シベリアにおけるパラスにあたる研究者が、東南アジアにおいても、やはり17世紀から18世紀にかけて、植民地支配や商館の便宜を得て研究をはじめている。インドのマラバル海岸におけるレーデ、アンボイナ群島におけるルンプ、インドシナにおけるルーレイロといった人々の研究はその代表的なものであった。しかし、これらのパイオニアたちの論文は、学問の進歩とともに、その価値がうすれて来る。彼等の認識なり、方法なりは、後日の研究者を満足させるに足りない。そこで第2期として、これらの先駆者たちの仕事の再検討と、さらに豊富な資料による詳細な研究が望まれてくる。メルルのフィリピン諸島の研究、ラッフルス博物館を中心とするイギリスの、マレー地方の研究、ボイデンゾルグ（ボゴール）を基地とするオランダの研究者たちの活動がはじまり、それが現代にも及んでいる。これは日本の植物誌におけるマキシモウィッチの時代にあたるとも考えられる。第3期になって、それらの研究が郷土誌と結びつく。日本においても明治以後に、日本の学者が直接に日本のフロラを手がけることにより、はじめて満足な植物誌の完成を見るに至ったように、東南アジアにおいても、早晩この状態が出来上らなければならない。しかし、現状においてはこの理想からは遥かに遠くて、これを日本にあてはめてみるならば、先づ明治の中期、あるいは後期と考えてよいのではないか、これが私の得た率直な印象であった。ただ、日本の場合と異なるところは、既に世界全体の研究者の意識のレベルが当時よりもはるかに進歩していて、研究が加速されている。従って今後の東南アジア各国における研究はスピードアップされるものと思われる。

4 動物誌のばあい

動物誌の研究は、植物のそれとはいささか異なった

要素がある。植物は多種・多様であり、顕花植物から、シダやコケの類までいろいろであるが、それらは資料の採集や、取扱いの面からみれば比較的近似した方法と注意によって、かなりコンプリートに材料を集めることができる。しかるに動物関係の資料は、それぞれのグループによって生活状態が甚だしく異なっているため、個々の専門家によってのみ、その動物群の研究にあたいする十分な資料を得ることができる。このことは植物でも、たとえばキノコの類では、特別の配慮を要するのに当たるともいえる。夜行性のヘビ・トカゲの類を対象とすれば、他の昼行性のグループなどには殆んど手を出すことは不可能と思わねばならない。

東南アジアにおいては、世界の他の地域における状態とおなじように、まづ哺乳類が注目された。それから昆虫の類、とくに色彩その他の点で目につきやすいものが先づ研究の対象となったが、やがてはそれが、他の、もっとアカデミカルな研究におきかえられていく。ワレスの研究旅行にはじまったスンダ列島の生物地理が、レンシュの陸棲貝類による分布論や、淡水魚の分布による理論によって、おきかえられたことなどは、この一面をよく表わしている。

しかし、すべての専門の学者を調査に参加させることは不可能でもあり、不必要でもある。現地が旅行し難い地方であれば、そこに到達することだけでも意義があるので、そのような地域では、とにかく何がしかの資料を入手し、研究者に提供することだけで、その地域についての新しい知見が得られる。戦後、京都大学を中心としてたくさんの遠征隊が計画され、いろいろな地域が手がけられてきた。また、本学以外にも、いろいろの生物関係の遠征隊の実績があるが、これらをふりかえてみると、いずれもその隊のなかの少数の隊員が、いろいろの資料を手がけていることが多い。レパトリーの広いのは勿論結構なことではあるが、それが所謂“つまみ食い”あるいは“おみやげ”程度の資料でなければ幸いである。その結果としては、たくさんの報告は出来上るけれども、その一つ一つの報告は断片的のものであって、その地域全体の特徴を浮きぼりにするには甚だ遠い。

東南アジアにおいては、このような“つまみ食い”の段階はすでに終わっているものと思わねばならない。

ここで動物誌を追及しようとするならば、できるだけテーマをしぼり、できるだけ専門の研究者を現地におくり込んで、インテンシブに資料を得、データを集積する必要がある。こうして初めて、存在価値のあるような研究が可能になると思われる。

こうすると、京都大学の研究スタッフをもっては、能力が不足してくる。それだけでは問題の一部分のみしか取扱えない。幸いにしてセンターはインター・ユニバーシティの原則に立ち、このような学外の研究者を含めての活動を考えることになっているのは、その点生物班にとっては、誠に心強いことであって、願わくばそれが口頭禅にとどまらず、名実共に日本の東南アジア研究センターとなることを目標としたい。

5 将来の課題

上述のような生物誌研究のルーチン・ワークと並行して、それぞれの研究面でのテーマが考えられる。それらは現地の要求、その必然性などとカミ合って出て来るものといえよう。例えば、タイ国の陸水における第1次生産量の研究（カセツェート大学、スバツティ教授の提案）、マレーの石灰岩地帯の洞穴を主とした人類学・生物学的調査（シンガポール大学の提案）、アンボイナ諸島の総合調査（こちらからボゴール大学に提出）などの共同研究が、今回の旅行から浮び上ってきている。東南アジアにおいては、今までにもそれ自体として立派な調査研究があった。ドイツのプレーン学派を中心とするスンダ諸島の陸水の研究、或はハーバート大学を中心とするクワイ溪谷の新石器人類の探検などは、このようなプロジェクトとしては、われわれがモデルケースとするに足る立派な計画であり、成果であると思われる。そのためには単に現地国の学者・学界との協調ばかりでなく、各国の学者と多角的に協同して、国際的な学問感覚をふまえて立案し、行動していくことが必要と思われる。

今回の旅行の範囲内では、インドネシアの外領を除けば、生物関係の研究調査に困難と思われる地域は見当らなかった。したがってセンターとしては、生物班はインテンシブ・サーベイの方向に進んでよいのでないか、他面、調査困難の地域については総合計画を考えるべきである。これが私の結論であった。